

[資料・その他]

看護学科における模擬患者参加型授業と OSCE の実施・評価（その1） —新設科目「看護実践演習」・OSCE の位置づけと プロジェクト委員会活動—

佐々木 栄子, 木浪 智佳子

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

キーワード

模擬患者参加型授業, OSCE, 看護実践力

I. はじめに

医療が益々高度化, 複雑化する中, 臨床現場では援助的人間関係を形成するためのコミュニケーション技術を含む看護実践力の向上が求められている。平成23年「大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会」最終報告(文部科学省, 2011)では, コアとなる看護実践能力(表1)と卒業時到達目標が示され, 学士課程で看護実践能力を育成する教育の工夫が必要不可欠となっている。看護実践力とは, 知識, 技術を特定の状況や背景の中で統合し, 科学的根拠に基づいた, 倫理的で効果的な看護を実践できる力(松谷・三浦・平林・佐居・卯野木・大隈・奥・堀・井部・高屋・西野・寺田・飯田・佐藤, 2010)である。そこに必要な能力は観察力, 判断力, 全体的にその人を見ることができるといえる力, 根拠を持ち論理的に思考する力であり, それらを言語及び行動で適切に表現できる力である。このような看護実践力が4年間のカリキュラムの中で育成されることが期待されている。

本学科では, 上記の動きに対応すべく, カリキュラム検討委員会やFD (faculty development, 以下FDとする)研修の中で, 今後の教育内容について検討してきた。その結果, 平成24年度新カリキュラム新設科目として3年前期に模擬患者 (standardized patient, simulated patient, 以下SPとする)参加型授業である「看護実践演習」を設定し, 客観的臨床能力試験 (objective structured clinical examination, 以下OSCEとする)を取り入れることとなった。この科目とOSCEを行うにあたっては, 平成24年度から看護実践演習プロジェクト委員会(以下, 委員会とする)が組成され, 企画・運営に関わっている。

今回, 平成24年~27年までの実践と評価をまとめることで, 今後の礎になると考え, 報告することとした。なお, この報告は以下の4編で構成する。

1. 新設科目「看護実践演習」・OSCE の位置づけとプロジェクト委員会活動 (本編)
2. 演習の運営【單元班】
3. OSCE の作成と運営【OSCE 班】
4. 模擬患者の育成と授業への参加【SP 班】

II. 本学科における新設科目「看護実践演習」の設定および「OSCE」実施の背景と位置づけ

「看護実践演習」は平成24年度導入新カリキュラムの新設科目(3年前期)である。新たに設定した背景としては, 看護実践能力の育成が重要視されている中で, 臨地実習に向け技術習得レベルの向上を図る必要性が浮き彫りになったことがあげられる。具体的には, 2年次の技術試験に合格し, 3年次の臨地実習に臨んではいるものの, 実際の患者を対象とした看護場面での技術レベルの課題, 技術習得意欲の低さや危機感の薄さ, 学生同士の技術演習の臨場感の限界などが挙げられていた。そこで, 臨地実習前に知識と技術を総合的に統合する科目として看護実践演習を設定し, その評価としてOSCEを実施することとなった。この科目の設定に向けては委員会が組成される前に, カリキュラム検討委員会でも協議され, 3年前期必修科目に位置づけることと, 以下の学習目標が打ち出された。

1. 援助的人間関係のためのコミュニケーションがとれる
2. 対象理解のための観察ができ, 得られた情報の意味をその場で判断できる。
3. 対象者の特性と状況に応じた説明ができる。
4. 原理・原則を踏まえ, 対象の状況に応じた看護技術を実践できる。

また, カリキュラム検討委員会では, 本科目に関わる教員は看護学科の全教員とし(生命基礎講座の教員は除く, 以下, 全教員とする), グループ演習指導に当たることが決定した。その理由は, 3年前期の臨地

<連絡先>

佐々木 栄子

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

表1 「コアとなる看護実践能力」

*は本科目と特に関係する実践力

<p>I群 ヒューマンケアの基本に関する実践能力</p> <p>1) 看護の対象となる人々の尊厳と権利を擁護する能力 *</p> <p>2) 実施する看護について説明し同意を得る能力 *</p> <p>3) 援助的関係を形成する能力 *</p> <p>II群 根拠に基づき看護を計画的に実践する能力</p> <p>4) 根拠に基づいた看護を提供する能力 *</p> <p>5) 計画的に看護を実践する能力 *</p> <p>6) 健康レベルを成長発達に応じて査定 (Assessment) する能力</p> <p>7) 個人と家族の生活を査定 (Assessment) する能力</p> <p>8) 地域の特性と健康課題を査定 (Assessment) する能力</p> <p>9) 看護援助技術を適切に実施する能力 *</p> <p>III群 特定の健康課題に対応する実践能力</p> <p>10) 健康の保持増進と疾病を予防する能力</p> <p>11) 急激な健康破たんと回復過程にある人々を援助する能力</p> <p>12) 慢性疾患及び慢性的な健康課題を有する人々を援助する能力 *</p> <p>13) 終末期にある人々を援助する能力</p> <p>IV群 ケア環境とチーム体制整備に関する実践能力</p> <p>14) 保健医療福祉における看護活動と看護ケアの質を改善する能力</p> <p>15) 地域ケアの構築と看護機能の充実を図る能力</p> <p>16) 安全なケア環境を提供する能力 *</p> <p>17) 保健医療福祉における協働と連携をする能力</p> <p>18) 社会の動向を踏まえて看護を創造するための基礎となる能力</p> <p>V群 専門職者として研鑽し続ける基本能力</p> <p>19) 生涯にわたり継続して専門的能力を向上させる能力 *</p> <p>20) 看護専門職としての価値と専門性を発展させる能力</p>

実習前の技術習得状況を共通理解できること、各領域実習に向けて課題の傾向が把握でき、指導ポイントの確認や指導方法などを事前に検討できることなどであった。このように講座・部門の枠を超えて全教員が関わる科目設定は、看護学科として初の試みであり、その運営を看護実践演習プロジェクト委員会が行うこととなった。

委員会では、卒業時到達目標および学年別到達目標(表2)と学習目標の関連、主要関連科目との関連を考え、科目の位置づけ(図1)を再確認しながら、教育内容を検討した。

また、OSCEは臨地実習を履修できるか否かを見極めるための試験ではなく、学生が試験に向けて練習し技術力を向上すること、自分が「できたこと」「できなかったこと」を確認し自覚すること、そしてその後の自己学習の促進と実践力の向上を目指すための動機づけがねらいであることを確認した。つまり技術力の確認と学習の動機づけのOSCEと位置づけ、課題や評価基準を検討することとした。

これまで本学科の技術演習では、学生同士が患者役、看護師役となり行ってきた。この方法は、思考し

ながらディスカッションし、練習を重ねることが出来る点では効果的である。しかし、後期の臨地実習に向け、実践力を養うためにはリアリティーのある場面を設定したシミュレーション学習が必要と考え、SP参加型演習を取り入れることとした。

以上のことを踏まえ、演習、OSCE、そしてSPの養成と対応を行うために委員会の組織を構成した。次に委員会の役割と運営について報告する。

Ⅲ. 看護実践演習プロジェクト委員会の役割と運営の実際

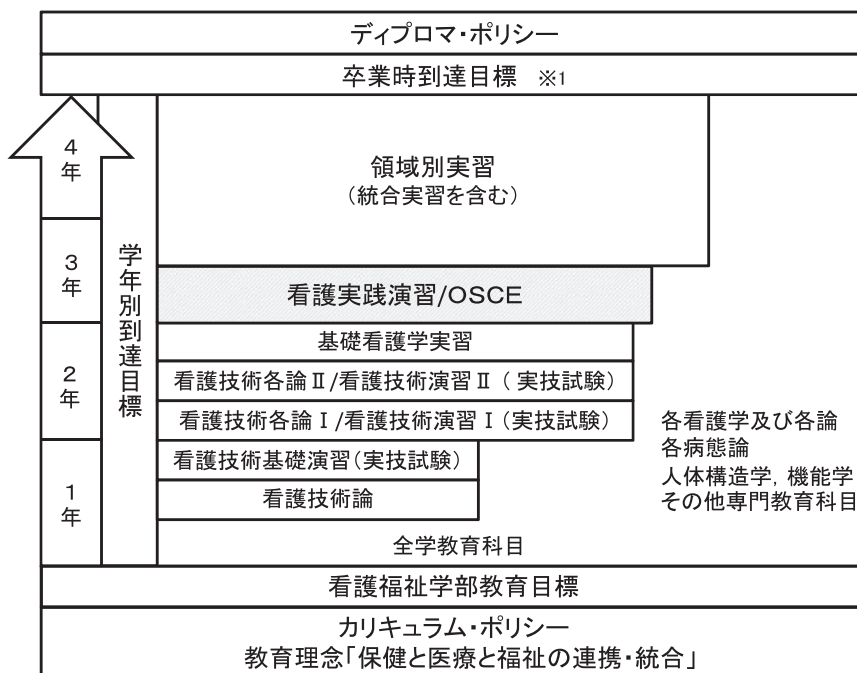
委員会発足にあたり、役割の明確化と組織創りを行い、以下の内容を委員会で検討、学科会議で了承を得てスタートした。

1. 役割

「看護実践演習」(3年前期、必修、1単位)開講に向け、授業内容・方法、評価方法(OSCE)を検討し、実際の企画、運営にあたる。

表2 本学科学年別到達目標

1年生	<ul style="list-style-type: none"> ○専門職としての看護師の役割と責任について考える ○人々の生命の尊重や尊厳を守る意味を考える ○看護実践の特徴とプロセスを理解する ○専門職として必要な幅広い教養を深める ○看護技術の基本を理解する
2年生	<ul style="list-style-type: none"> ○専門職として対象者との援助的人間関係を築く ○対象者の多様な価値観を踏まえ、個別性を理解する ○対象者の健康状況および健康問題を踏まえ、援助方法を考える ○看護実践に必要な基本的知識を身につける ○原理、原則を踏まえ、基礎看護技術を修得する
3年生	<ul style="list-style-type: none"> ○チームアプローチの在り方および看護職の役割を考える ○専門職業人としての自己の課題を考える ○倫理原則に基づいて、対象者の倫理的課題を考える ○対象者の健康状況や健康問題に応じて、援助を実施し、評価する ○既修の知識・技術を活用し、科学的根拠に基づく看護実践を提供する
4年生	<ul style="list-style-type: none"> ○チームの一員として看護実践を提供する ○地域的・国際的な視野で看護の役割と責任を探究する ○専門職業人としての自己の課題を明らかにする ○倫理原則に基づいた看護実践を提供する ○倫理的かつ批判的思考を活用し、対象者に生じた現象や看護実践のあり方を探究する ○既修の知識・技術を統合し、個人と家族の健康状況や健康問題に応じて、科学的根拠に基づく看護実践を提供する



※1 文部科学省，大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会．最終報告，2011．3

図1 「看護実践演習」位置づけ (主な関連科目を中心とした概略図)

2. 方針

1) 学生に向けて

【自己学習の推進と実践力育成】

3年後期の臨地実習に向けて、学生の自己学習力を伸ばす。

学習目標達成に向けて、自己学習の環境を整える。自己学習の環境として、場所の確保、時間の保証、指導体制を整える。

学習の動機付けとなり、自己の課題を明確にするための指導を検討する。

2) 講座、教員に向けて

【相互理解と共有・協力】

各講座の持っている力を生かし集結する。

各講座の講義、演習、実習内容を知り、それをふまえて検討する。

臨地実習前の到達目標（評価基準）を明確にし、共有する

OSCE や SP に関する理解を深め、共通認識のもと進めていけるよう、研修の機会を作る。

3. 委員の構成と任期（原則）

各講座・部門から1～2名の委員が選出する。事情により任期途中で交代する場合は、後任を選出する。

第1期 平成24年4月～平成26年3月 17名

第2期 平成26年3月～平成27年9月 12名

4. 定例会議（原則）

第3火曜日 14時30分～16時 3階会議室

5. 組織と役割（図2）

1) 委員長（1名）

年間計画立案、予算案作成・予算執行状況確認、各部門間の調整

2) 副委員長（1名）

委員長補佐、単元部門兼務

3) 単元班（4～7名）

看護実践演習の内容・方法の検討、運営

4) OSCE 班（4～5名）

OSCE 課題・評価基準、運営、成績集計

5) 模擬患者班（3～4名）

模擬患者養成計画・実際、当別町 SP 研究会との調整、他学部 SP 担当教員との調整

6) 単元班, OSCE 班, SP 班には, それぞれリーダーを置く

7) 平成27年度は新たに以下の係りを設け, 各班から1～2名で組織し, それぞれリーダーを置く。

(1) アンケート係り（3名）：学生・模擬患者・教員アンケート作成と集計

(2) 物品係り（3名）：物品管理

(3) 報告書係り（5名）：実施報告作成

6. 進行計画

1) 平成24年度：「看護実践演習」の具体化・可視化

(1) 情報収集

・他学部（歯学部、心理科学部等）の模擬患者参加型演習と OSCE の見学、資料収集

・当別 SP 研究会について

(2) 学習目標, 単元目標, 内容, 方法の明確化

(3) SP 養成概要作成

2) 平成25年度：リハーサルと修正

(1) 模擬授業, 模擬 OSCE の実施

(2) 看護学科 SP 養成開始

(3) OSCE 運営概要, マニュアル作成

3) 平成26, 27年度：実施と評価, 次年度計画

7. 運営の実際

1) 活動方針と進行計画に基づいた運営

委員会を運営する中で、まず行ったことは、初年度開講までの計画、方針と進行計画を明確にすることだった。本科目は新設科目であること、SP 参加型演習や OSCE を行うこと、SP の協力を得ること、看護学科全教員が関わることなど、初めて取り組むことばかりであった。このことは作り上げる充実感、達成感を味わえる機会でもあるが、見通しのなさや混乱につながる可能性もある。そのため、学生が学習目標の達成をめざし、委員ひとり一人のアイデアと力が同じ方に向かって発揮できる組織とするためには、活動方針と進行計画の策定は欠かせないと考えた。具体的な活動方針と計画内容の詳細は、先に記載した通りである。平成26年度の開講に向けて、平成24年度は本科目の具体化と可視化、平成25年度は模擬 OSCE などのリハーサルと修正を計画し実施した。また平成26年度は看護福祉学部 FD 研修として「シミュレーション教育」を企画し、模擬患者参加型演習の課題やシナリ

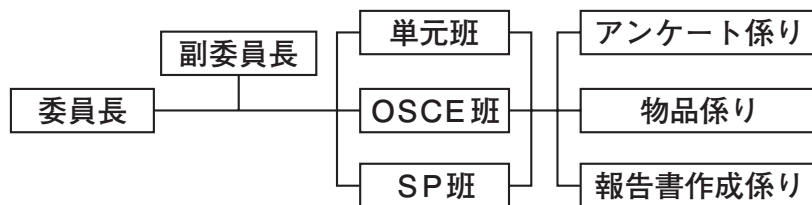


図2 看護実践演習プロジェクト委員会組織図

オ、学生へのフィードバック方法などを学び、初年度の演習に備えた。

2年間の準備期間中は、進行計画に沿って進めることができ、初年度である平成26年度の授業をスタートした。2年目にあたる平成27年の計画は、初年度の評価とほぼ並行して行った。その間、一部委員の交代、人数の変更などもあったが、大きな混乱なく進めることができた。

2) 具体的学習目標の明確化と内容の検討

委員会の中で、学生のレディネスを確認し、それを踏まえた具体的学習目標の検討、OSCE課題などを話し合った。準備の中で最も時間を要し、議論したことは、具体的学習目標と事例、シナリオ作成、そしてOSCE課題・評価基準であった。これらの議論は大変有意義であり、各講座・部門で大切にしていることや教育内容などの理解につながり、学生の学習内容、プロセスや反応、達成状況などを知ることができた。また、委員個々の教育観を共有する場となり、本学科のカリキュラムを議論する時間ともなった。このことは、講座・部門の枠を超え教育を語り、形作ることの楽しさを実感し、教員としての成長にもつながったのではないかと考えている。具体的な検討プロセスや内容については、単元班、OSCE班の中で報告する。

3) 当別 SP 研究会の協力による看護学科 SP 養成

SP参加型授業を行うにあたり、SPの養成が急務となった。本学歯学部では、平成16年から当別SP研究会を組織し、SP養成が始まり、SP参加型演習を行っていた。そこで、歯学部千葉逸朗教授の協力を得て、当別SP研究会を中心にSPを依頼し、養成をスタートした。これらの過程と内容、SPの感想などは、SP班から報告する。

4) 学生、SP、教員対象のアンケート調査の実施

SP参加型授業、OSCEに関するアンケート調査を行い、授業に対する学生の評価および自己評価、教員による授業評価、SPの参加回数、感想等を調査した。なお、調査に当たっては、北海道医療大学看護福祉学部倫理委員会の承認を得て実施した。

平成26年度の結果は、27年度の学習内容や方法、OSCE課題や評価基準、SP養成方法などの検討に活用し、改善策を工夫した。その結果、学生の「臨地実習に向けての学習の動機づけにつながった」の質問に関しては、「強くそう思う」「そう思う」が平成26年度60%代だったが、平成27年度は80%を超え、課題内容やグループ演習、グループワーク方法の工夫の効果と考えられた。その他の結果の詳細は、本編に続く各班から報告する。

5) 教員対象の説明会等の開催

看護学科全教員が指導に関わるという点では、全教員への説明会、模擬OSCEを開催し、委員会としての考え、教育内容、運営方法などを、その都度説明しながら進めた。特に初年度は、看護実践演習説明会、OSCE説明会に関する資料を約1週間前に配布し、事前に目を通す時間をとった。また、SP説明会への参加も促し、SP養成についても理解を得るよう努めた。

6) 委員会の開催

定例委員会は講義・実習等でやむを得ず欠席する委員もいたが、各部門から最低1名は出席することで、運営には支障なく進めることができた。委員会以外でも各班や係りごとに熱心な話し合いが行われ、開講に向けての準備を進めた。

IV. まとめ

以上、平成24～27年度の看護実践演習・OSCEの位置づけと委員会の役割と活動について整理した。学生ひとり一人の学習効果が高まり、学習目標が達成されることを目指し、委員会を進め、試行錯誤しながら一つひとつ形にしてきた。委員会での熱い議論、看護学科全教員の理解と協力があり、看護実践演習とOSCEの基礎を形作ることができた。その過程や内容、学生およびSPの感想、今後の課題などの詳細は、単元班、OSCE班、SP班の各編で報告する。

委員会としての今後の課題は、看護実践演習の土台として形作られた内容や方法を、柔軟性を持ちつつ充実させていくことと、これまで同様、常に学生の成長や課題を確認しながら進めていくことである。

文献

- 松谷美和子、三浦友里子、平林優子、佐居由美、卯野木健、大隈香、奥裕美、堀成美、井部敏子、高屋尚子、西野理英、寺田麻子、飯田正子、佐藤エキ子(2010). 看護実践能力：概念、構造、および評価. 聖路加看護学会誌, 14(2), 18-28.
- 文部科学省(2011). 大学における看護系人材育成の在り方に関する検討会 最終報告.

受付：2015年11月30日

受理：2016年2月26日